

消費される縄文文化

大塚 達朗

今日の私の話は吉田発表と接点が多いと考えている。要点は昨今、縄文文化はハイパーになってきているということです。より具体的には吉田発表の中にあつた Homogeneous Japan が立ち上がってしまつて、縄文時代研究というのは、日本以外の人と接点を持つてなくなつてしまつてしまうのではないかと危惧している。それは良くないのではないか、学問の責任者として、学問を楽しくやるために、万人のためにするにはどうするかを考えたい。ずっと昔から続いている縄文時代を研究できるのは楽しいですよ、という理解をされることもあるが、そういうことではないことをお話したい。

私は、今のハイパーになってきている縄文文化には反対です。学問にとってこの枠組みは役に立たない。外国の人がアクセスもできないものになってきている。その原因は遡れば、モースが大森貝塚を掘つて大事な仕事をしたのに、「日本考古学」という枠組みでは伝わっていない。モースによる大森貝塚の報告書の現物を見ると、1879年＝神武起源で2539年と書いてある。University of Tokyo Japan の最初の学術報告書です。ジョン・ラボックの『先史時代』という当時の大ベストセラーで、西洋世界において神はいない世界からどう考えるかという重要な本を参照し、紹介している。モースの大きな論点は、決して人種論ではなく、世界の他の地域と同じように日本には新石器時代があります、ということだったので。

戦後考古学は反省的に考えることがなく、ある枠組みを重視している。旧石器・縄文・弥生・古墳という枠組みが確立するのは1945年から1946年のことです。1952年に日本が独立した後長い日本の歴史が出来上がってきました。私が大学に入って考古学を始めた時に、非常に不思議なことに多く遭遇しました。1971年に大学に入って、73年に考古学研究室に入りましたが、その頃は網野善彦さんが出てきたり、戦後歴史学が動いていた時期でした。網野さんも戦後民主的な歴史教育運動に関わっていましたが、1970年代から歴史学は石母田正先生も含めて反省的に変わつてきている時期でした。その時期

に考古学は「どんどん掘れていいな」程度のことでしかなかった。本当に驚いたのは大学院に入って、千葉で発掘調査をした時に、30,000㎡の遺跡が2・3年で無くなる。考古学は楽天的に「どんどん掘れていいな」という時期に、歴史学はどんどん深刻に考え出していた。

私は小学生で安保闘争に参加しています、家庭の事情もありましたが、大学に入った時には、内田樹さんの1年下で同じ活動をしていました。そういうことを通じて、私が一番気になっているのは「反省をしたか」ということです。私の場合は考古学研究室に入った時には、どこの研究室でもよかったんです。一番楽しそうに研究していたのが考古学研究室の先生方でした。1972年に研究室訪問した時に、当時助手だった藤本強先生に会って、これはいいなと思った。そういう先生と、埋蔵文化財を担当している方々はあまりにも違った。埋蔵文化財を担当している方々は戦後の枠組みを「俺たちが実証していくんだ」という言い方をよくしていた。それは旧石器・縄紋・弥生・古墳と続く枠組みのことですが、それにはとても違和感があった。私の先生は佐藤達夫先生で、佐藤先生の先生は山内清男先生です。その頃の佐藤先生は「山内先生は大先生だけどなんとかしないといけない」という考え方だった。佐藤先生は1974年に共著で『図説日本の歴史 1: 日本のあけぼの』（三上・他 1974）という本を出しますが、私はその頃に教えてもらっています。私は大学に入るのだけが目的

*下部にある註は吉田泰幸による

モースによる大森貝塚の報告書 “Memoirs of Science Department, University of Tokio Japan Volume I Part I”として出版された。近藤義郎氏と佐原眞編訳の岩波文庫版がある（モース・近藤・佐原訳 1983）。

人種論 モースは大森貝塚の報告書の中で、大森貝塚をのこしたのはプレ・アイヌの人々であったとしている。

網野善彦（あみの・よしひこ）歴史学者。NHK人間大学のタイトル「日本史再考」が網野氏の研究上の重要なキーワードである。いつからか「日本」か、「百姓」は全て農民か、などの問いが著名。代表的な著作に『蒙古襲来：転換する社会』、『無縁・公界・楽：日本中世の自由と平和』、『異形の王権』、『東と西の語る日本の歴史』などがある。『縄文聖地巡礼』の著者、中沢新一の叔父にあたる（中沢 2004）。

石母田正（いしもだ・ただし／しょう）歴史学者。古代史、中世史が専門で、唯物史観に基づく分析を展開した。1950年代の国民的歴史科学運動の提唱者でもある。後にどちらにも自己批判的になり、大塚氏の言う1970年代は「反省的に変わってきている時期」と捉えられる。代表的な著作に『中世の世界の形成』がある。

内田樹（うちだ・たつる）フランス現代思想などの研究者。多くの著書を出版している。思想の概要は以下の個人ホームページで知ることができる。

<http://blog.tatsuru.com>

内田氏本人は、以下のブログへのポストでなぜ自分が「保守」とレッテルを貼られるのかわからないと述べている。

http://blog.tatsuru.com/2008/06/11_1205.php

(2017年2月7日にアクセス)

で、どうするかは考えてなかったんです。楽しそうにやっている考古学研究室に入って、全く授業に出ていなかったら、佐藤先生から電話がかかってくる、出てこいと。それでしょうがないので出て行きました。私がある頃やりたかったのは、チャイルドにならって日本のUrbanizationを考えたかった。日本の古代都城制の研究をしていました。それで奈良文化財研究所にも行きましたが、その人も「これからは俺たちの時代だ」とか言っている。一方で佐藤先生は深刻に色々考えている。その差は印象的だった。それを解消できなかったから今のような、私がハイパー縄紋文化と揶揄するものが立ち上がってしまった。

古代都城制をやっている私を佐藤先生が呼びつけて、自由気ままに色々なことを喋って、「じゃあさよなら」の繰り返しでした。筆記試験で適当なことを書いても成績は全て「優」でした。考古学研究室は学生に対しては、いつも「優」しかくれない。地獄ですよ、これって。それが圧力となって大学院に行かざるを得ないのです。大学院に入ってカルチャーショックだったのは、明治大学や國學院大学などの学生に「大塚さんはどういう土器を持っているんですか」と聞かれたことです。つまり少年少女の時から土器を集めている人が考古学をやっているんです。昔は「少年探偵団」と言っていましたが、女性もいたはずなので「少年少女探偵団」と言いますが、そういう人たちが大学に入って考古学をやっている。私もそういう人間だと思われましたが、私はそうではなかったので、非常に違和感がありました。学問は論理的にやるはずなのに、そういうことがベースで情緒的にやっている人がいる。これはよく理解できなかった。そういうことを経験していると、ハイパー縄紋文化は余計におかしなものに見える。

春成秀爾先生の図 (Fig. 6.2.1) の見方としては、この図の縄紋文化はどうとう環境変化という山内清男・芹沢長介先生の短期・長期編年論争のガイドラインを超えてしまった、ということです。気候変動を突破していく縄紋文化になっていって、「新しい教科書を作る会」の考え方にどんどん近づいていっているのではないかと。なぜそうなるのか、それが私の考えたいことです。さらに、私の先輩の今村啓爾さんまで同じようなこと、「縄紋文化の驚くべき長さと持続性」(今村 2014: 662) と書いている。

1974年に共著で『図説日本の歴史 1: 日本のあけぼの』執筆者は三上次男(編集責任者)、佐藤達夫、岡本勇、輪島誠一、甘粕健。佐藤氏は第二章にあたる「黎明期の日本」を執筆した(佐藤 1974)。

奈良文化財研究所 文化財の総合的研究機関で、平城宮跡、飛鳥・藤原地区の宮跡の発掘調査と研究が主要事業の一つである。

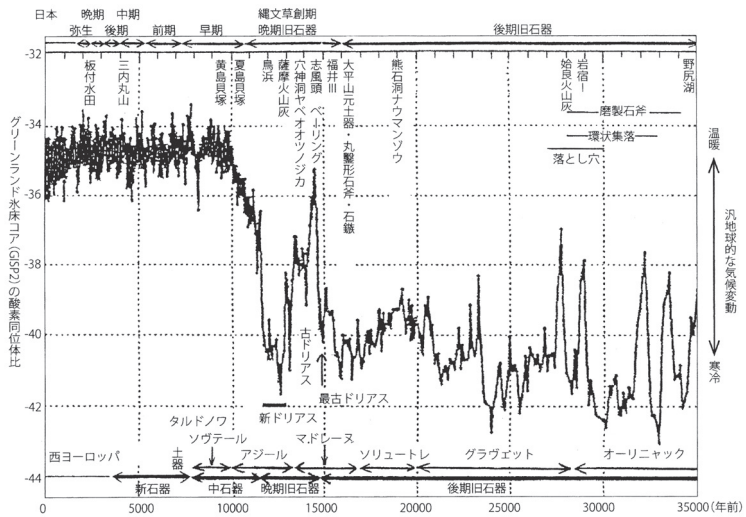


Fig. 6.2.1 「ハイパー縄文文化」の一例 (春成 2008)

なぜそんなことになったかという、芹沢・山内先生の論争がうまく消化されていないことに原因があるのではないかと。芹沢先生も山内先生も縄紋土器はどこから来たことを前提にしていたが、年代観は放射性炭素年代測定法の測定値を受け入れるかどうかで大きな違いがあった。ただ、芹沢先生が12,000 BPと言ったのは、後氷期に土器が出てくるとしたのです。ドングリの森が出て来て、それを開拓するのが縄紋じゃないかと。一方、山内先生は、2,500 BC頃は気候冷涼化でサケが東日本に下って来た時に土器も入って来たという理解をしていた。世間的には相反する理解であるかのように思われていますが、実は同じパラダイム上にいる。縄紋土器は外から来たという理解は一致しています。そして環境変化を常に念頭に置いている。だから二人は鏡像関係みたいなものです。

芹沢先生にお会いしたことがあったのですが、芹沢先生は山内先生をすごく尊敬していて「山内先生との違いは年代だけだ」と言っていた。一度入って来たらずっと続くという縄紋土器一系統説は共有していたのです。1969年の本で意見が対立します。この本は対立した意見でも両方載せようという編集方針でできた本です。ところが二人を両極端に置いて、最古の縄紋土器を考えようというのが小林達雄さんたちです。外から来るという考えは共通していて、春成さんも多分同じ考えでしょう。それで一旦土器が来た後はそれがずっと続くという実体を立ち上げてしまう。

なぜこうなるのかという、みなさん山内先生の編年表 (Fig. 6.2.2) を誤解

縄紋土器型式の大別

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根?× (+)	ひじ山 粕畑		黒島×	戰場×谷×
前期	石川野× (+)	圓筒土器 下層式 (4型式以上)	笠濱 大木 1 〃 2a,b 〃 3-5 〃 6	蓮花積下 田關山 式黒溜 諸磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) (+)	針ノ木×	國府北白川 1 大歳山	渡ノ森 里木 1	藩?
中期	(+) (+)	圓筒上 a b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8 a,b 〃 9,10	御館臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E 〃 (新)	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 }?
後期	青柳町× (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B 〃 安行 1,2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	龜ヶ 開式 (+) (+) (+) (+)	大洞 B 〃 B-C 〃 C1,2 〃 A,A'	安行 2-3 〃 3	(+) (+) (+) (+)	吉胡× 〃 ×	宮龍× 日下×竹ノ内×	津雲下層	御領

註記 1. この表は假製のものとあつて、後日訂正増補する筈です。
 2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
 3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

Fig. 6. 2. 2 山内清男による縄紋土器型式編年研究「縄紋土器型式の大別」(山内 1937)

している。この編年表で山内先生が言ったのは、縄紋土器を解剖すると型式が見えて来る。それを解剖すると文様帯が見えて来る。だから土器型式が並んだものが縄紋土器ではなくて、土器型式を解剖して見えた本質的なもの(=文様帯)が繋がり合ったものが縄紋土器だと言っている。

1969年以降は、古い土器を見つけようということが自己目的化します。そして古い土器が見つかった時に、縄紋土器は各地の型式群で成り立つものだから、より古くその繋がりを追っかけていけばいいのだという単純な話になってしまった。1970年代以後はそうした繋がりを持つ縄紋土器を追いかければいつか最古の縄紋土器に辿りつくだろうという樂觀論に満ち溢れた時代になってしまった。なおかつそれは埋藏文化財体制に支えられていて、いずれ解決するだろうという異常な状態になってしまった。私はその時に論理を分かっているからだめなのでは、と思っていた。1969年以降に起こったのは、山内先生の文様帯系統論に基づく縄紋土器一系統説が全く理解されずに、縄紋土器は各地の型式群の集合体だという理解になってしまったことです。集合体だから古い土器が見つければそれは縄紋土器の元だと、するとその縄紋文化は環境変化をも乗り越えるハイパーなものになってしまう。わたしがハイパーと言っているのは、そういう理由です。

なぜそれが問題かという、私は排外主義につながってしまうことを恐れている。「日本列島はこんなに長い歴史を持っていて、縄紋文化を学べば学ぶほど、私たちは日本人の精神を学べるんですね」という声も出て来てしまったり、実際に私も耳にする。万世一系という考え方と縄紋文化が結びついてしまうのでは

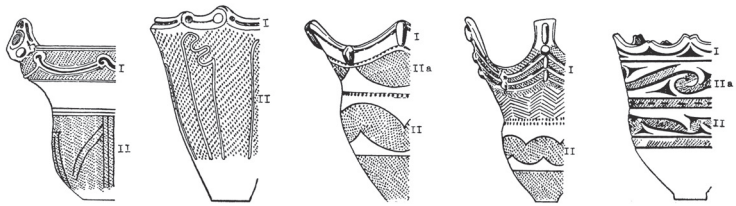


Fig. 6.2.3 山内清男による文様帯表記（山内 1964 [一部改変]）

ないか、私はそのことを危惧します。その時には、山内先生がそもそも何を言っていたかを理解することが大事です。

山内先生の編年表は縄紋土器の年代的組織という理解になります。縄紋土器の単位は型式です。これだけでは系統性は見えません。型式自身を比較解剖学的に切開した時に出て来るのが系統性という話を山内先生はしている。論理的には間違っていないように見えるが、目に見えないものが残っていて、目に見えないものに系統性があると言っていることになる。彼はそれを文様帯系統論 (Fig. 6.2.3) と呼んだのです。文様帯として系統性があるということを示したのですが、それ以降の人たちはこれを勘違いしてしまった。山内先生は「ここが文様帯だ」ではなくて、「ここに文様帯がある」と言っていたんです。山内先生だけが見える貫かれた系譜が文様帯で、だから縄紋土器は一系統だということです。土器の表面には見えなくて、その内部に古く遡る、それらを貫く同一性があるということです。みなさんどう思いますか、これは。私は文様帯系統論は証明できない理論だと思います。他方でハイパー縄紋文化を支えている縄紋土器研究は、土器型式がなぜか遠い過去へ積み上がっていくと思っていないと成り立たない。だから山内先生を誤解した上で成立しているのが現在のハイパー縄紋文化論です。

山内先生の 1969 年の図 (Fig. 6.2.4) は先生にとって画竜点睛で、文化というのは環境との適応関係という考え方を打ち出したものだったのです。この図では、縄紋文化は気候が冷涼化した 2500BC 頃に登場して、冷涼で一定の環境の中で存続するものです。なぜ一定と言うかということ、彼は東西の差を強調していた。東は遺跡が多くて、西は遺跡が少ない。その状態がずっと続くのはなぜかと言うと、一定の環境だったから、そういう論理です。彼の文化論は、気候変化に対応するように遺物・遺跡が変わって来る、弥生文化の登場の理解もそうです。ただこの図も矛盾を孕んでいます。無土器新石器文化を設定しているのですが、丸ノミが出て来るのは、冷涼な気候のもとでシベリアの方の文化

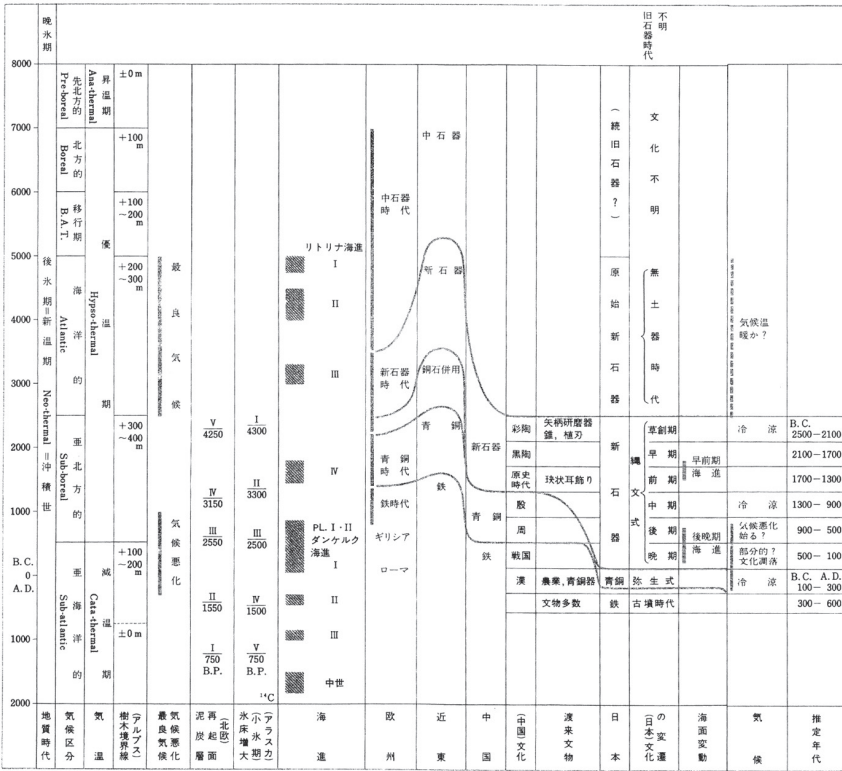


Fig. 6.2.4 山内清男による「縄文文化とそれをとりまく大陸の文化、自然」(山内 1969 [一部改変])

が入って来るという理解で、それを種子柴・長者久保文化と再解釈している人がいますが、山内先生にとっては、さきがけ的に日本列島に登場する新石器文化で、気候冷涼化によって北方の人たちが南に移動する、日本列島にサケと人が入って来るという理解ですが、そうするとサケを追いかける人たちが2回南下することになる。2回目で土器を持ち込むという話になっていますが、土器でサケを煮たのかという疑問があります。サケ・マス論のポイントは東の豊かさを証明するための理屈でもあるのですが、山内先生にとっては縄紋土器起源論でもある。ただ、サケを調理するのにおそらく土器は必要ないので、この図は矛盾だらけです。12,000BP頃に隆起線紋土器が出現したとする長期編年の芹沢先生は東西共にあるドングリと土器が関係するのではないかと見通しを示した(芹沢 1962)。この点は芹沢先生に分があると思う。

もうひとつ編年表 (Fig. 6.2.2) で注目して欲しいのは、これは 1937 年当時の植民地を外した「日本」の範囲です。これが山内先生的には固有の Japan なのでしょう。その固有の日本に十分に土器が詰まっている。山内にとって、植

民地を含めて拡大したものは日本じゃない、この島国日本が「日本」である。これをどうやって論理的に説明するかが山内清男の使命らしい。それが、土器表面にではなくて、見えない文様帯に歴史性があるとする文様帯系統論 (Fig. 6.2.3) です。しかし、これはどう考えてもおかしい。ここまで文様帯系統論を批判するのは私ぐらいで珍しいらしくて、世間では誤解が広がっている状況です。だから、満洲国はいつできたか (1932 年)、日支事変はいつおきたか (1937 年)、太平洋戦争にいつ突入していったか (1941 年)、その背景に着目して欲しい。その最中で彼はこの表を出すということは、彼は「土器拾って楽しい青少年少女探偵団」ではありません。彼はアナーキスト、思想家です。文章では当時の特高に捕まらないように「樺太」を登場させたりするのですが、図はこのとおりの範囲に収めている。この時代に島国日本を打ち出すのは、満洲国を立てて大陸に乗り出していく帝国日本に狂喜する風潮を、山内先生は抑制しなかったのです。考古学者としての山内先生は、一方で進化論を論じるまともな学者です。そして進化論の理論を援用しています。それによって文章では特高警察の目をかいくぐる。その工夫として、土器は新陳代謝が盛んだと言っている。土器を生物にたとえて、ニッチを見つけて亜種を生み出す生物のような縄紋土器を想定して固有の日本を立ち上げた。生物に例えていけば帝国日本や皇室への批判とは受け取られないが、植民地を編年表に入れるのは拒否する。なぜこんなことを話すかというと、考古学の人と話していて、「私は日米安保とかどうでもいいです」とかの物言いは学問的エートスとして信じられないからです。

1969 年の図 (Fig. 6.2.4) に戻ると、芹沢先生の説を受け入れると、縄紋文化は異なる環境の下でも成立することになってしまう。それが「一定環境での適応」を説く山内先生には受け入れられなかった。そのロジックに気がつかずに、1945 年以降の日本考古学は山内清男を神格化していく。その一人が近藤義郎さんです。考古学研究会の代表をしていた方ですが、近藤さんは「戦後考古学の反省と課題」(1964) という論文を書いていて、戦争中に日本考古学は実証的に研究を行っていたので自分たちの領域を守っていたという言い方をして、今は戦後民主主義の下で自由を獲得したのだから、私たちは自由に研究ができる。その時に山内清男の研究は実証的な編年研究だと近藤さんは言いますが、この理解は間違っています。山内先生にとってはこの編年表は固有の日本を立ち上げて、そこに土器型式を充当させたものです。一定の環境に対する適応を果たした中で、後から入ってくる文化にも適応する、そういう考え方です。何回も繰り返しますが、この表は単に実証的な編年研究ではないです。目的は固有の日本を説明することです。だから、本末転倒です。山内先生のことを知れ

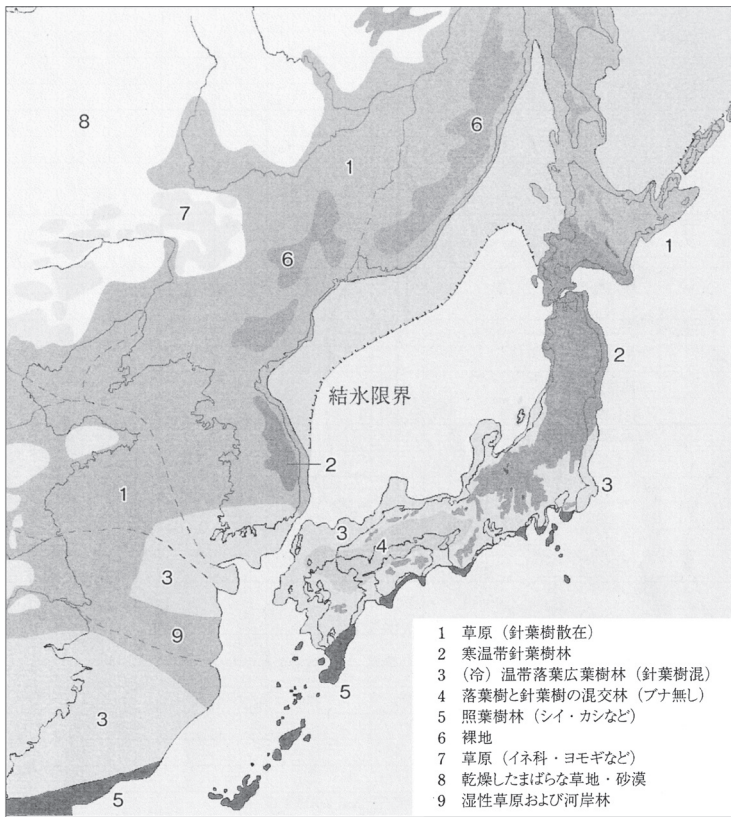


Fig. 6.2.5 N 島（日本島）・Jゾーン（太平洋沿岸部）の一例（杉山 2010 [一部改変]）

ば知るほど、この人はただ者ではないと思いました。追悼論集でも山内先生の奇人変人エピソードが紹介されているようですが、奇人変人の部分を拡大していくのは戦後考古学の手口のひとつです。山内先生は奇人変人だけきちんとした実証的な研究をしているというストーリーを作っていく。だけどその実証的とされている研究は縄紋文化を究明している訳ではなくて、思想的なものの要請で出来ているのです。それなのに近藤先生は、山内先生を実証的研究者と決めつけるのです。考古学の人が思想的な面から見た考古学の歴史やこれまでに色々あったことを議論していかないと、新しい教科書を作る会のようにになってしまうかもしれないし、一方で中沢さんと坂本さんのお二人のように楽天的な議論になってしまいますが、本当はそうではないことを研究者は発信していかないといけない。

そのために、いくつかの地図をもとに議論をしたい (Fig. 6.2.5, 6.2.6)。最終氷期最寒冷期の頃の地図はいろいろあって、細かな違いがあるのですが、旧石



Fig. 6.2.6 N島（日本島）・Jゾーン（太平洋沿岸部）の一例（辻 2014 [一部改変]）

器研究者も似たような地図を作っていて、議論しています。16,000BP という大平山元I遺跡の土器が出た時期はこれがもうちょっと細くなった地形と考えればいいです。まだまだこんな状態の中で、大陸と近い状態で、日本海は淡水が海水の上に乗っていて寒くて風が吹いていて水分が蒸発しない、こういう時期に広域に移動する動物を追いかけていく移動性が高い生活が適応的である、という議論を旧石器時代研究者はしています。その時に、「古本州島」であるとか、「古サハリン」、「古北海道」という風に名前をつけていますが（佐藤・他 2011）、私はこれは良くないと思います。成瀬洋先生の 1977 年刊行の『日本島の生い立ち』という有名な本があります。旧石器研究者はグローバルに研究していると言いながら、この本に言及しない。「日本島」というのは日本列島が出てくる前の概念です。日本海が成立して以降の後氷期の段階は日本列島だけど、それ以前は「日本島」と名付けていた。この本は日本列島の地形的な特徴をよく説明した名著だと思います。私が論文の中で「N島」や「日本島」と躊躇なく書くのは、学生時代にこの本を読んでいたからです。ところが旧石器研究者は「古本州島」と名前をつけています。本州の旧石器研究がヘゲモニーを取っていると、そういう意識かもしれない。しかも、この地図の中には仮想日本列島がある。ここで出てくるネーミングは大きな問題があって、最終氷期最寒冷期の頃まで日本列島を遡らせる意識が働いているのではないでしょう

か。

私が注目して欲しいのは各地図の太平洋側の南半です。ここはドングリが手に入る森林帯で、日本列島じゃない時に太平洋側の縁にあります。この森林帯は照葉樹林帯であるとか (Fig. 6.2.5)、暖温带落葉樹林帯であるとか (Fig. 6.2.6)、各地図で若干異なるのですが、これまでの研究であまり注目されていないこのゾーン、私が言う「Jゾーン」に着目すべきです。16,000BP という測定値に妥当性を認めるのであれば、ここにこういう森林帯があることにも着目すべきです。なぜなら、隆起線紋土器の古い部分はこのゾーンに分布しているからです。

今日、私はやや唐突な話をしましたが、従来の研究は山内清男先生の話をよく理解せずに、縄紋土器一系統説をどんどん進め、縄紋土器を何の疑問もなく古く遡らせるのですが、彼らが安心してそういうことをするのは、山内先生が日本列島を与件としていたからです。そういう大先生が言っている日本列島のことを自分たちが議論してもいいという「寄らば大樹の陰」のような議論です。16,000BP では、日本列島とは異なる地理空間があるわけなので、それぞれを歴史の舞台としてみて別々の議論をしたらどうですかというのが、私が縄紋草創期研究をする中で気がついたことです。自分で隆起線紋土器を研究していく上で、古い段階は「Jゾーン」に収まっていて、新しくなると拡散しているようです。爪形紋の時期になると、このゾーンの外から入ってくる、ということも起きます。「日本島」の中で、私は誤解を生まないように「N島」と名付けていますが、「N島」と日本列島に別々の文化があったとして見たほうがいいのかという方針で今研究をしています。大平山元は今の青森県、北の方なので、環境が全く違う、針葉樹林帯の中です。違う環境で土器は色々異なる事情の下で出てきたものとしてみるのはどうか。従来の理解のように外から土器が来て縄紋土器として内的に発達するのではなくて、「Jゾーン」の方が土器利用のノウハウが高まっていった安定的に栄えたのではないかと。そのあとにどうなったかは、海進もあってまた違う状況を想定しないとイケない。いわゆる草創期から異なる文化圏を想定すべきで、「古本州島」というネーミングはそうした様相を見えなくするだけだと思います。そのほかに面白いのは、種子島はその当時でも高い目印だったようです。暖流の西にあるランドスケープとして注目すべきではないかと思う。種子島の遺跡の隆起線紋土器は古いところから連続して変化しているので、石鏃+土器という狩猟採集社会の形成を考える上で今後キーとなる地域ではないかと考えています。他所から何か入ってくるというのは、固有な日本列島を想定しているような議論で、一旦入ったものは自律して変化して云々という議論はやめた方がいい。むしろ、環境が変化している中で、先適応という概念を使って、「Jゾーン」の重要性を考えた方がいいのではないかと思う。先適応と

というのは、渡辺仁先生から教わったことのひとつです。渡辺仁先生は山内清男先生に敬意をもち、『縄文式階層化社会』（1990）という本を書いた時の「縄文式」というのは山内先生の縄紋式という意味です。逆に私が教えてもらっていた頃の佐藤先生は山内先生を冷ややかに見ていた。世間の印象とは逆です。これは余談でしたが、先適応ということで試行錯誤していく中で花開いた土器文化として「Jゾーン」の中の相互交流を見るべきだと思います。土器を作る人と狩猟採集をする人は同じだろうかという疑問を私は持っていて、土器が発達する時にはすでに階層化社会でもいいのではないかとも思っています。「Jゾーン」の森林帯が実際どういう木の種類なのか、どの程度の範囲までこの森林帯が伸びているのかは、福井洞穴や泉福寺洞穴の位置を考えた場合には重要な課題です。

最後に申し上げたいのは、固有日本列島を想定して山内先生的な縄紋土器一系統説を唱えるのは、いろんな意味で無理があるということです。山内先生が戦争中に戦争協力をしなかった、これは立派なことだと思う。今の日本の政治状況が不穏な時に、なぜ考古学者は平気で古い時期にも日本列島があると言い、山内先生に乗った上でハイパー縄紋文化を唱えるのか。それでは様々な因果関係、相互交流の検討のような、歴史研究のダイナミズムを失わせるのではと危惧しています。日本列島を与件とした縄紋文化というのはやめましょう、山内先生が明らかにした編年関係は結構当たっていると看做しても、です。私たちは今あるデータから何を言い得るかをあらためて考えるべきです。山内先生の編年表は実証的なものにとどまるのではなくて、多分に思想的なものです。1937年時点では重要な意味を持ったかもしれない、しかし2016年の今、これに依拠するのは非常に危険だということです。

福井洞穴 長崎県北松浦郡吉井町（現・佐世保市吉井町）に所在する旧石器時代末から縄文草創期の洞窟遺跡。

泉福寺洞穴 長崎県佐世保市瀬戸越町に所在する旧石器時代末から縄文草創期を主体とした洞窟遺

跡。福井洞穴と並んで、土器起源論の争点となった遺跡と言える。両遺跡の地理的位置は、Fig. 6.2.6では「Jゾーン」に非常に近く見えるのが、大塚氏が森林帯の種類や範囲に関心を促す理由であろう。